

新連載

都市空間の 構想力

東京大学
都市デザイン研究室

空間文化
の博物学

東京

第1回

すべての都市は
デザインされている。
計画者の視点で都市の
風景論を深化させ、
都市を読む、
「都市空間の構想力」
とは――。



「都市空間の構想力」序説

西村幸夫(東京大学教授)

匿名の風景にも「意志」がある

もういちど前頁の俯瞰写真を開いてみてほしい。どこにもあるような都会の混乱したスカイラインである。奥には東京ドームといった特別の構造物も見えるが、ここで注目してほしいのは手前の当たり前にひろがる建物群である。自然発生的に集まった建物群、とりたてて特徴のない密集市街地、匿名性の高い無秩序な住宅地の一典型、モニュメンタリテイの欠落した平板で雑然とした都市風景——こうした表現のどれもがぴったりと当てはまる風景ではないか。

しかし、本連載で明らかにしたいのはそれとはまったく逆の「事実」である。つまり、この無名の風景に意志があり、企図があり、物語があるという「事実」なのである。そして

その「事実」を元手に風景の蘇生をはかることが可能だという道筋を示したい。

考えても見てほしい、ひとつひとつの建物は戸建ての木造住宅であれ、RC造のマンションであれ、自分の懐具合と相談しながら、与えられた敷地の中でそれぞれの小さな夢を実現しようとして建てられたに違いない。妥協の産物としての建物だつたとしても、妥協をしなければならぬ理由があったはずである。異なった時代背景と異なった経済事情を抱えながらも、おのおのの建物は土地の地勢や時代の趨勢のなかでそれぞれの小さな解決を図ってきた。

個々の建物が語り出す物語の間には明晰な脈絡はないかもしれないが、それらが全体として奏でるコーラスには時代の精神が宿っているのではないだろうか。まったく偶然に、なんの脈絡もな

るのだ。ただし、ここでいう都市空間の「事実」とはカッコ付きの事実であり、それは都市空間の構想力を読みとろうとする私たち住み手の側に芽生える「事実」であることをあらかじめことわっておきたい。

そこをどのように活かすかといった戦略も読めてくれるというものだ。

都市空間の修辞

都市空間そのもののなかに積層された意図が織り込まれ、あたかも共同の意志のように読める、そうした意志があることを示したいと思う。それは空間の修辞といえるようなものである。都市の文法の中にそれぞれ都市空間は意図を持って布置されている。そうした意図は間違いなく地形や歴史、そこでの生活風景と密接に関わり合っている。

都市空間自体が構想力を持っている

私たちの作業は都市空間の奥に潜んでいるこのような構想力をえぐり出し、都市空間の多様な物語群として読者の前に提起することである。本連載の作業は東京を舞台としているが、対象として東京を選ぶことには本質的な意味はない。都市空間が保持する構想力は、もちろんその表



くひかれた道路などあるはずがない。それぞれの時代にそれぞれ固有の事情から開かれた道路が時代ごとに重層し、影響し合いながらネットワークを形成し、それをさらに発達させていく。その一断面、現代という時代で切り取ったひとつの断面が、いま私たちの目の前にひろがっている道路網なのである。

ところが普段私たちは現代以外の断面で道路網を見ることはない。目の前の道路網を所与のものとして考



樋口一葉が18歳から21歳まで(1890~1893)、つまり死の3年前まで住んでいた菊坂の路地裏。しかし、こうした史実はここではさほど重要ではない。この路地が重層した空間の構想力によって生み出され、空間そのものが迫真の力を持って私たちに迫ってくるという「事実」が肝腎なのである。

出は個々に固有のものではあるものの、全体としては普遍的なものだからである。

連載第1回が本郷から始まっているのも特別な意味はない。また、今後の連載は場所ごとに記述していくものでもない。次回以降の記述は都市空間の構想力のあり方をいくつかの類型に分けて提示していくことになる。初回に本郷という特定の場所を題材として議論を進めているのは、土地に蓄積されたさまざまな意図が一般的にどのように表出しているといえるのかを例証するためである。都市空間の一例としてたまたま本郷を取り上げたと思っていただけ

たい。都市空間に何らかの介入をする際に、ここでいうところの都市空間の構想力を正しく理解することによって、個人の意志を超えた潮流としての都市デザインが可能となるのではないか。そうした行為が蓄積することによって、都市空間の構想力は自己実現を果たすことになる。

ここで私たちが試みようとしているのは、近代の影響を受けていない伝統的な集落で読み取ることができたデザインの意図をさらに掘り下げ、混迷を極めているように見える日本の都市において、都市のダイナミズムのなかで見えにくくなっていく空間の意志を拾いおこそうということである。

都市空間から都市デザインへ

都市空間自体に構想力を見いだすことができるとしても、この「事実」をもとにわざわざ連載を組むことのねらいは何か。

それは、都市空間に内在している構想力を明文化することによって都市空間の構成をよりよく理解するだけでなく、都市空間を良い方向へ変

える以外の選択肢は通常あり得ない。しかし、この見慣れた道すじをと、たとえば建設者の側から見ると、まったく異なった様相があらわれてくる。それが時代ごとに重層しているということは、道路網というものもが構想された空間の時間的な集積と見なせるということの意味している。

そう考えるとそこに土地の奥深い意図を読み取ることができるとはいえないか。土地の意図が理解できれば、

都市空間の構想力の読み取り方を明示することはおのずと都市空間のこれからのあるべき方向性を示すことにつながるだろう。こうした作業は新しい時代における日本の都市計画の基本作業となり、都市デザインの拠って立つ指標となると信じるからである。



【台①】 台町と菊坂を結ぶ一筋のみちを辿ると、微妙に軸線の振れた箇所遭遇する。(下図のA地点)

台町・本妙寺跡 (文京区本郷5丁目)

(102頁)

みちの形が漸進の履歴を刻む

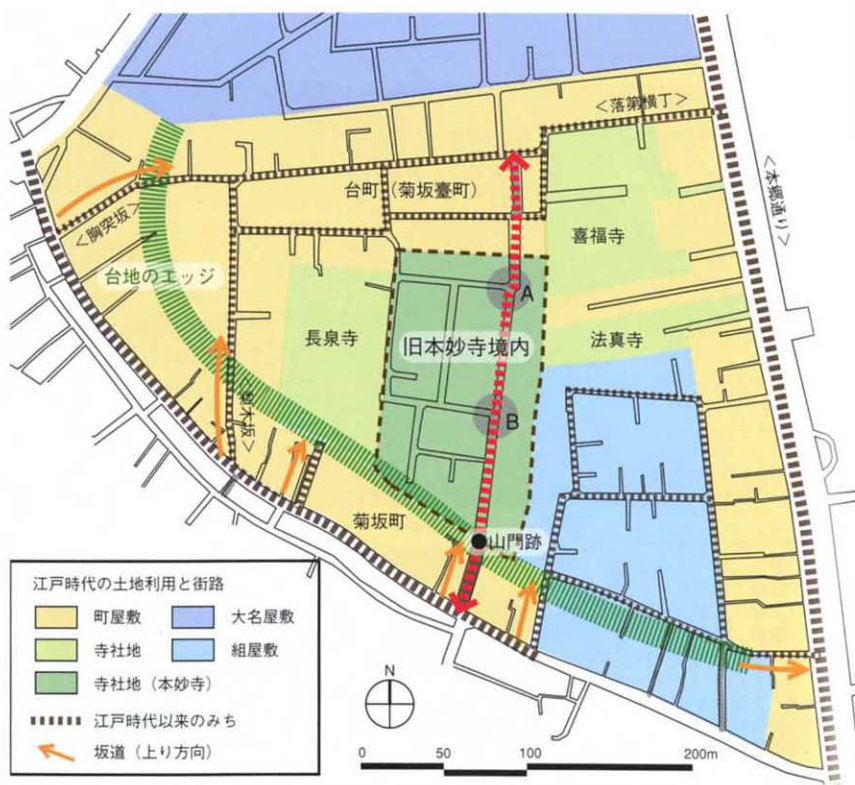
江戸時代、台町周辺には土地利用の異なる複数の領域が組み合わされていた。菊坂臺町と尾根道の本郷通り(旧中山道)、谷道の菊坂に沿って町屋敷が、南東の一角には組屋敷が、これらの領域に囲まれるように、内側に四つの寺院が存在した。このうち、菊坂から参道を引き込んでいた本妙寺は、明治42年に移転することとなり、当初の参道は徐々に延伸され、台町へとつながる一筋のみちができる。



【台③】 幅員の変化 (B地点)



【台④】 旧本妙寺参道



【台②】 台町と菊坂を結ぶみちが抜ける一帯は、かつて本妙寺境内であった。



【森①】 本郷通りから直交する宮前通りをまっすぐ進んでいくと、その先に三角形の膨らみのある不思議な六叉路にあたる。この叉路は、地域の領域性をつかむための「へそ」となる。

森川町 (文京区本郷6丁目)

(101頁)

叉路がまちの領域をつかみとる

江戸期まで下屋敷であった敷地が、明治期以降の宅地化により都市に取り込まれ、地域のまとまりが見えにくくなった。しかし、中央の「叉路」とこれを中心とした街路により、「宮前・宮裏」を始めとした領域が今も見え隠れする。また、叉路や曲がり地域にもいくつか存在し、領域性をつかむ手がかりとなる。



【森③】 本郷館前の「叉路」



【森④】 太栄館前の「曲がり」



【森②】 中央の六叉路を中心として見えにくい領域が把握できる



【西①】 西片町の中心に位置する西片公園。
公園の周囲には良好な戸建て住宅地が一様に広がる。しかし、公園からまちに一步踏み出せば、それぞれの地区の雰囲気の違いを実感する。

西片町(文京区西片1・2丁目)

(104頁)

公園がまちの空間的秩序を生み出す



【西③】 「に」の街路景観



【西④】 「いの新開地」の街路景観

「い・ろ・は」は、西片町において昭和39年まで使われていた住居表示である。明治期に開発された「に・ほ・へ」は、道路基盤は整っているが、街区規模が大きく、地割や住宅の配置に明確な秩序は感じられない。一方「い」は昭和以降の開発であり、特に「いの新開地」は十字に区画された道路沿いに整然と敷地の大きな邸宅が並ぶ。



【西②】 西片町の旧住居表示区分と各地区の特徴



【菊①】 台地を鋭く刻む谷底に、2本の道が、わずか10mの間隔を空けて並走する。奥行き3mに満たない住宅が、ひっそりとうねる下道に顔を向ける。

菊坂町(文京区本郷4・5丁目)

(103頁)

まちが地形をかたどり、編み込む

【菊②】 菊坂町界隈の地形と空間構造



2本の谷道、上道・下道の間は、ところどころが階段で結ばれている。表(上道)と裏(下道)は、幅員、交通量、日当たりなど、大きく対照をなす。上道・下道からは、崖下に掘られた井戸を抱いて、路地が枝のように伸びる。急峻なくつかの坂が、台地との往還となっている。



【菊③】 菊坂(上道)



【菊④】 下道



【菊⑤】 井戸と路地

半閉じの街路が「二団地」を守り抜く

東片町(文京区向丘1丁目)

(105頁)



【東①】 中央街路からまちを見通す。戸建て住宅の塀やアパートのエントランスからなる見慣れた風景。しかし、中央街路は交差する街路もなく真っ直ぐに200m延びた後、行き止まる…。

まちを歩きながら、まちをほどこく

本郷台地の都市空間

始まりはベルク

都市空間の構想力研究が開始されたのは、ちょうど1年前であった。

昨年末、東京大学都市デザイン研究室では、地理学の大家で日本の都市にも造詣の深いオギュスタン・ベルク氏の特別講義を企画した(本誌10号、93・98頁に講義録掲載)。その際、ベルク氏にただ講義を頂くだけでは片務的ではないか、貴重な講義への御礼として、研究室としてもベルク氏に何らかの御土産をお渡ししないといけないのではないかと、この意見が出た。私達ならではの御土産、それは日本の都市空間やまちづくりについての日頃の研究成果をお伝えすることに他ならない。

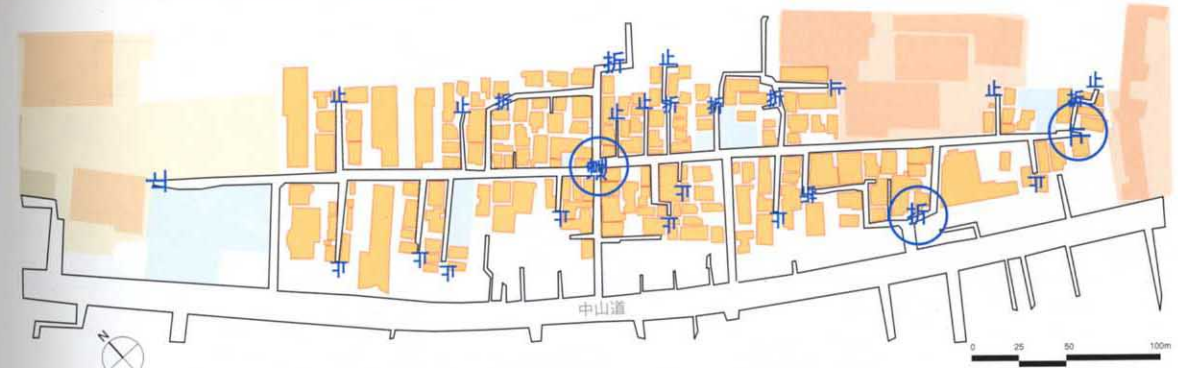
ただし、相手は「風土」の概念で見事に日本の空間文化を解いてみせたあのベルク氏である。彼を唸らせるような都市空間論を机上で展開できる自信は正直言ってない。そこで

思いついたのは、東京大学のある本郷台地の具体の都市空間に力を借りようということであった。ベルク氏と大学周辺をまち歩きするという企画が持ち上がった。

しかし、例えば「ここはかつて樋口一葉が暮らした家です」「この坂からの眺めは石川啄木が次のように詠っています。あそこにその歌碑があります」といった類の名所案内では許されまい。退屈するベルク氏の表情が目につく。まち歩きをベルク氏にとってもわれわれにとっても有意義な時間にするには、どのような工夫が必要なのだろうか。

名所から「まち」へ

妙案は浮かばなかった。とりあえず、まちづくりに取り組む際にどのまちでも最初に行うべき作業を本郷台地でも行うことにした。つまり、古地図等を収集し、まちの形成過程を調べる机上作業と、まちを歩き、



【東②】 中山道から一步入った内側に広がる東片町の街路は、折れ、行き止まり、違(たが)いが目立つ。



【東③】 入口は折れ曲がっている。

【東④】 中央街路は行き止まる。中点では軸を微妙に違える。



「本郷の都市空間研究参加者」岡村祐、後藤健太郎、酒井憲一、鈴木智香子、竹山奈未、田中曉子、中島直人、永瀬節治、野原卓、坂内良明(何れも当時、東京大学都市デザイン研究室所属)

まちづくりの資源をかたづけしから探し集めるフィールド作業である。

例えば、本郷台地のまちはあまりに身近であるが故に、まちづくりや都市デザインの対象地として見ることなかった。しかし、改めて基礎的な作業を行ってみると、見慣れた都市空間が新鮮に見えてきた。

日常行動によってのみ認識していた本郷台地の生活景が、明確な構想、企画を持った風景として見えてきた。まちなかの個々の場所が一つのまちの構造の中で息づいていることが確認された。普段、何気なく通り過ぎていた様々な場所たちが、個々

- 森川町** 旧岡崎藩下屋敷。地形は平坦。明治期以降に宅地化され、現在では戸建て住宅・アパートが建ち並ぶ。
- 台町・本妙寺跡** 江戸期は寺社地に囲まれた町人地。明治期以降、本妙寺境内が順次、宅地化され、菊坂町と連結した。
- 菊坂町** 旧川筋に並行する菊坂を境に北が町人地、南が武家地。地形の変化に富む。路地を中心とした住宅地が残存する。
- 西片町** 旧福山藩中屋敷。明治期以降、計画的宅地化。かつて学者町として知られた低層戸建て住宅地である。
- 東片町** 中山道の町人地の裏手に広がる大縄地。明治期以降、組屋敷は路地を伴い細分化された。

■それぞれ特徴の異なる境界が存在する

■まち歩きでは、本郷台地の各界隈を巡った

の「名所」性の主張ではなく、「まち」についての話題をわれわれに投げかけてくるようになったのである。

本郷台地のまち

本郷台地は武蔵野台地の突端に位置している。江戸期には既に市街化が進んでおり、武家地、町人地、寺社のモザイク的土地利用が展開されていた。更に武家地には、加賀藩中屋敷の他、本屋敷から下級武士の組屋敷まで多様な風景があった。そして、こうした江戸の市街地は、明治期以降に主に武家地や寺社地の宅地化、それに伴う街路網の形成を経て、現在のまちへと変貌を遂げた。

例えば、森川町やその北の西片町は大名屋敷地であったが、帝国大学の立地と時を同じくして、明治期に一気に街路が引かれ、宅地化された。一方、町人地であった菊坂町では、現在でも長い坂道に商店が散在している。その上の台町は寺社地に囲われた変わらぬ姿を見せている。東片町も江戸期の宅地を継承している。東京の都市空間の特徴としてよく

江戸期の街路や土地利用の継承性が指摘されるが、本郷台地のまちはまさにそうした特徴を持っている。

ただし、街路網や建築物は変化を遂げている。かつての大名屋敷地を二分する形で言問通りが直通して入り、菊坂は本郷通りまで延長された。また、一部を除いて戦災被害を受けており、戦前からの家屋は数えるほどしかない。本郷通りなどの幹線沿いでは、既に高層ビルが壁のように建ち並んでいる。

つまり、本郷台地のまちは、歴史が誰の眼にも見えるような特別なまぢではない。東京の中心部によくある、普通のまちである。そして、実は既に述べてきたように、一様な風景が広がっているのではない。雰囲気異なるいくつかの界隈の集合として捉えられるまちであった。

ある冬の日のまち歩き

ベルク氏を迎えてのまち歩きでは、その幾つかの界隈を順に巡っていくことになった。そして、各界隈で語りかけてくる都市空間に立ち止まり、耳をそばだて、応答を試みた。

先ず森川町に足を踏み入れて最初に眼に着いたのは、かつて商店街であった面影を僅かに残す道筋の終点に位置する特異な形の広場であった。この異形の空地は一体何なのか。広場の中心に立った時、広場から六方向に伸びていく道がそのヒントをわれわれに教えてくれた。

森川町から台町へと歩み出すと、どうも回り道をさせられている気分になり、困惑した。そして街路のネットワークが気になり出し、今度はまっすぐに繋がっているように思えた街路でさえ、実は幾つかの幅員の異なる街路の継ぎ足しで出来上がっていることに気付いた。一体どうして、すつと行かないのか。

台町から菊坂町に下りれば、そこには幾つもの階段があった。どうやら二つの並行する、しかし高さの違う道を繋ぐのが階段の役割のようだ。しかしそもそも何故、二つの道がすつと並行しているのだろうか。菊坂下まで降り、西片町へ抜けることにした。由緒ある高級住宅街以外の何者でもない街が広がっていたが、次第に風景が変わり始めた。街

路の方向が緩やかに振れ、建物が小ぶりになった。その転換点を思い出してみると、途中で通り過ぎた三角形の公園だった。この公園が持つ風景を転じる力は誰が仕込んだのか。西片町の住宅街から中山道に出た。中山道の裏手に入ると、西片町とは異なり、一見すると何の変哲もない普通の住宅街が広がっていた。ただ街路がまっすぐで妙に見通しきくので、その見通しに誘われて辿ってみると最後は行き止まってしまった。そういえば、一見ランダムに見えた路地も、一定の奥行きで行き止まっている。そうしたことが気になり出すのと同時に、ある一まとまりの領域に入り込んでしまったことを自覚した。この感覚、何ゆえか。

こうした疑問を歴史的な視点から一つ一つ解きながら、ベルク氏とのまち歩きは進行したのである。今回は連載のイントロダクションとして、本郷の台地各界隈ごとに、その都市空間と東京大学都市デザイン研究室有志の応答のエッセンスを、紹介することにした。

(中島直人)

森川町 叉路がまちの領域をつかみとる



【森⑥】映世神社
(1906年『東京江戸名所図会』)



【森⑤】映世神社前広場
(1882年『陸軍測量地図』)

【叉路の先にある神社】

本多家敷地内に建てられた神社(映世神社)は、叉路の先端に存在していた。手前の三角形のふくらみ部分にかつての鳥居が建っていたようである。

また、社殿の奥には、入口から見て富士山のある軸線上に築山も存在していたようであり、富士見信仰の影響も垣間見える。

【叉路に延びる宮前通り】

本郷通りから叉路までまっすぐと延びる商店街(宮前通り)は、住宅地の中に忽然と現れる。これは、江戸期から、本多家敷地内の映世神社が、時に神仏公開として開放され、明治期以降も年に一度は地域に開放されていたと言われており、露店の並ぶ通りとして当時から賑わっていたようだ。



【森⑦】昭和20年代の宮前通り
(『文京・まち再発見』)



【森⑧】現在の宮前通り

●住宅地に潜む不思議な「叉路」

森川町界隈は、微地形が入り込み、街路もやや入り組んでいて、森川町の先に向かおうとすると、方向感覚を失いがちなのだが、にもかかわらず、何故か迷わず着いてしまう、不思議な感覚があるエリアである。

本郷通りから、パーラー「万定」とともに忽然と現れる商店街(宮前通り)を北に入ると、三角形に広がった、不思議な「叉路」にやってくる。六叉路というべきか、交差点の集合体というべきか、不思議な形をしたこの叉路は、中心に三角形の「ふくらみ」をもった街路空間である。

江戸時代、森川町一体は、主に岡崎藩本多家の下屋敷であった。本多家の始祖本多忠勝を祀るため、下屋敷の敷地内に神社が設けられた(映世神社)。これが、現在の叉路であり、社殿は、パン屋・八百屋のある正面にあった。両者の間の路地は、社殿への参道であり、三角の空地部分には、鳥居が建てていた(森⑥)。この叉路は、お祭り時には広場としても利用されており、現在でも公共的な役割を担う、大切な場所である。

●叉路が生み出す「領域性」

古くから、「さ」という言葉は「境」を示すと言われるが、空間的にも神社の前は叉路として枝分かれさせることで、奥と手前に「結界」を創出する都市空間の技法があった。実際、この映世神社前の叉路とこれに直交する街路を境目として、「宮前」「宮裏」と呼ばれ、叉路が結界を生み出している。

屋敷地であった森川町では、明治期以降、本郷通り沿いをはじめ、西側斜面地(桑畑)、そして、言問通り開通と宅地化、都市化が進行し、屋敷の領域性が都市に埋没してゆく。

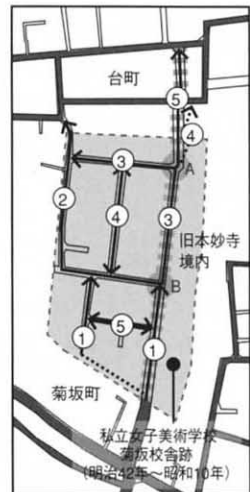
しかし、この叉路の存在が、一点でありながら、領域をつかみとる「へそ」となっている。この一点により、森川町全体を俯瞰しなくても、森川町の領域を感じ取ることができ、アイレベルに俯瞰の領域が広がってゆく。この叉路から延びる4本の街路も、細いながらまっすぐと延び、地域を支配する軸線として存在する。

また、地域内には、他にも叉路や曲がりがいっつか存在し、領域性をつかむてがかりとなる。

(野原 卓)

【本妙寺参道の漸進的な延伸】
当初、菊坂から導かれた参道は、旧境内の宅地化に伴って徐々に北側へと延伸し、やがて台町とつながられる。

街路が地図に現れる年代
 安政6 (1859) 年
 ① 明治20 (1887) 年
 ② 明治44 (1911) 年
 ③ 大正11 (1922) 年
 ④ 昭和7 (1932) 年
 ⑤ 昭和26 (1951) 年
 …… 消失した街路



【台⑤】本妙寺周辺の街路形成過程



【台⑥】明治中期の本妙寺境内 (左) と山門 (右) (『東京名所図絵 本郷区』)



【台⑦】明治期の本妙寺周辺 (左：明治16年『陸軍測量図』、右：明治28年『東京実測全図』)

【移転前の街路形成】
本妙寺移転前の明治28年の段階で、境内の北西端では既に台町へのアクセスが確保されている。ここでも台町の既存の通りとの接続部において、軸線の振れが見られ、局所的な調整が行われていることが分かる。

●菊坂へつながる一筋のみち
東大正門を出て、例えば菊坂の銭湯へ向かうとしよう。最短経路を取ろうとすると、通称「落第横丁」と呼ばれる幅員4mに満たない飲食街に入るこゝとなる。ここは江戸時代以来の道であり、一帯はかつて「菊坂臺町(明治以降は台町)」と呼ばれる町人地であった。現在は静かな住宅地に、明治期からの旅館街が混在する。「折れ」のある旧来の街路パターンを経て、本郷児童館付近を曲がり、南へ向かう一筋の道を辿る。これを進めば、菊坂はすぐそこだ。

かつての本妙寺は、菊坂から参道を上り山門をくぐると、両側に複数の塔頭が建ち並び、そこから西へ折れると本堂が、北側には墓が広がっていた(台⑦)。移転後の当初の宅地化は、参道から本堂に至る境内の道の一部をなぞるようになって行われたものと思われる。現在、旧参道の坂を登った付近にマンションが立地しているが、この敷地には、移転直前の明治42年に、女子美術学校(現女子美術大学)菊坂校舎が立地しているが、これは宅地化の最初期のものである。

その後、大正期になると北側の区画が割られ、宅地化が進む。さらに大正末から昭和初期にかけて、旧境内の北東部において、台町へのアクセスが確保されることとなる。

このように、旧参道が宅地化の段階に応じてじわじわと延びた結果、一筋のみちが出来上がった。先に述べた、分節部に見られる軸線の振れや幅員の変化は、形成時期の違いによるものであり、その履歴が、言わば街路形状に刻印されたものと見ることが出来る。

(永瀬節治)

●本妙寺の移転と旧参道の延伸
明暦の大火(1657年)の火元とも言われる本妙寺は、明治43年に巢鴨へ移転することとなり、以後、旧境内は徐々に宅地化され、それに応じてみちが付けられる(台⑤)。

菊坂町 — まちが地形をかたどり、編み込む

【下道の成り立ち】
谷の北側が町人地であった(菊坂町)のに対して、南側は武家地であった。台地上に大名屋敷(松平右京亮屋敷、小笠原佐渡守中屋敷など)が立地した後に、崖面と谷地の残余地が細分化されて、下級武士の住宅地となった。下道は、この谷地の武家地への接続道路として、「大どぶ」に沿ってできたものと思われる。上道との間の斜面は、空地であった。



【菊⑥】江戸時代の土地利用

●谷道・菊坂と「大どぶ」
菊坂町は、本郷台地を刻む谷あいには伸びる。谷道から、台地へ上る坂道や谷の内に入り組む路地が枝分かれしており、まちあるきを楽しむ人の姿も多い。われわれも、本郷通りの菊坂入り口から歩き始めよう。路端には「別れの橋跡」の旧跡案内札が立っている。谷筋を流れていた川「大どぶ」は、江戸時代、江戸市中を追われる者が見送りの者と別れる境界であったという。緩やかに暫く下ると、本妙寺坂と交差する。南北に上るV字坂を眺めながら谷地形を実感して立ち止まれば、地下を流れる下水の音が、ことのほか大きく聞こえる。水の音のする方、左手へ折れると、そこから下道が始まっている。大どぶの流水になった気分、こちらに入っていく。

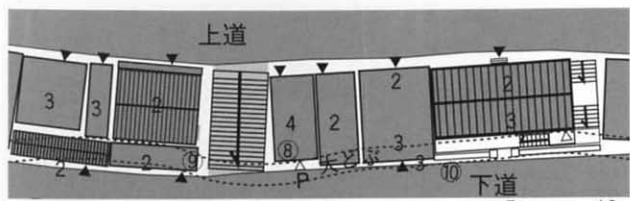
があつて、異様なまでに小さなその奥行きに目を奪われる(菊⑨)。大正末年に枯渇して埋め立てられた大どぶが、これらの建物の下を流れていたことは、ほぼたしかだろう。大どぶ跡地には、このように独立した新たな建物が建つほか、上道側の建物が建て増される(菊⑩)、上道側の敷地と統合されて新しい建物が建つ、という建築パターンが見られる。

元来南側だけに向いていた下道は、これらの建物によって、上道と対照をなすつつもゆるやかにつながり、新たな表情を持つことになった。江戸時代、武家地と町人地とを分かつた大どぶは、かたちのなくなった今でも隠然と下道と上道を隔てつつこれらを結んでいる。まちが地形をかたどり、編み込んでいくのだ。

●上道と下道のあいだ
下道に入ると、幅員がぐんと狭くなり、緩やかなうねりが先を見通させない。多くの建物が上道側に正面口を向け、下道に勝手口、あるいは車庫の入り口を向けている(菊⑧)なかで、上道側建物と背合わせに建つ数軒の建物

崖に向かって延びる路地を横目に、下道をさらに進めば、菊水湯の唐破風屋根が見えてくる。古地図によれば、大どぶは菊水湯の前で左折して下道を離れる。げに、菊水湯より向こうの建物は、2m近い石カベで下道にはきっぱり背を向けている。

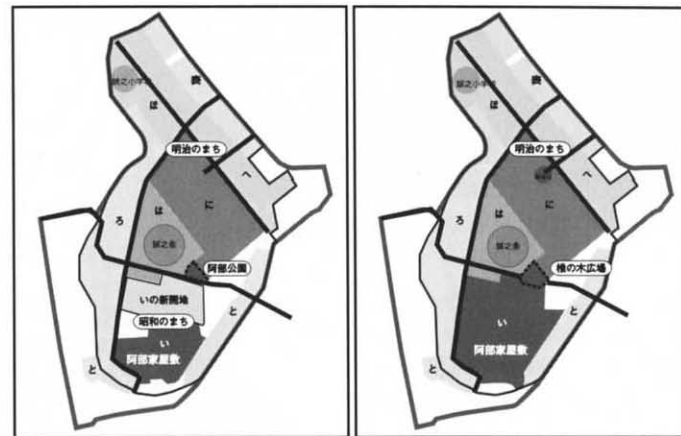
(鈴木智香子・坂内良明)



【菊⑦】上道と下道間の建築物
数字…階高/P…1階部分が駐車場/▼…正面入り口/△…勝手口

【菊⑧】下道に向けて駐車場を設ける集合住宅 / 【菊⑨】大どぶの川幅を感じさせる狭小奥行き住宅 / 【菊⑩】大どぶ埋め立て部に底をかけて勝手口を設けており、階段で上道ともつながっている





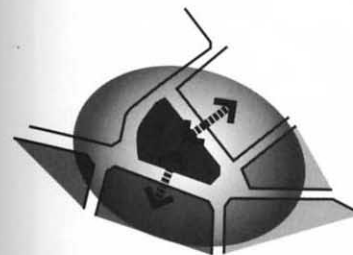
[西⑥] 昭和初期の西片町 [西⑤] 明治後期の西片町

【西片公園の履歴】

西片公園は、明治後期、阿部家屋敷地の一部ではあったが、「椎の木広場」としてまちの人々に開放され、既に開発が進んでいた住宅地（明治のまち）と屋敷地をつないだ [西⑤]。昭和に入ると、屋敷地は縮減し、「いの新開地」と呼ばれる住宅地が新たに造られた。ほぼ同時期に「椎の木広場」は「阿部公園」として公園となり、明治のまちと昭和のまちをつないだ [西⑥]。その後、「阿部公園」は昭和42年に「西片公園」として名称を変え、現在に至っている。因みに、大椎の木は、大正期から衰弱しはじめ、昭和39年に枯れてしまった。現在公園には、「世継ぎの椎」が植えられている。



【西⑦】 西片公園の大椎の木 (山口廣編 (1987) : 『郊外住宅地の系譜』、p.53)



【西⑧】 西片公園の空間作用

西片公園は、周囲の各地区の特性を際立たせる一方、良好な住宅地として一つにまとめ上げる力を有している。

●公園からまちを見通す

かつては「学者町」として多くの学者・文人が住み、現在でも品格ある良好な住宅地である西片町。中山道と崖に囲まれる地理的構造ゆえ、まちの領域は明確である。そして、このまち唯一の公園である西片公園がまちのほぼ中心に立地する。この巧妙に配置された公園が、西片町全体の空間的秩序を生み出している。すなわち、まちを構成する個（地区）の差異を際立たせると同時に、良好な住宅地として全体（まち）のまとまりを維持しているのだ。そして、この公園の空間作用は、公園形成の背景・過程に深く関係している。

●外からの形成原理

幕末期には福山藩阿部家の中屋敷であった西片町は、明治以後はその阿部家による段階的な住宅地開発が進められた。まちは主に、公園北東側の中山道と平行する道路を軸に明治期に開発された地区（明治のまち）と公園南側の南傾する地形に沿ってできた東西方向の道路を軸に昭和初期に開発された地区（昭和のまち、「いの新開地」）に

二分される。これら二つの軸は、平行も直交もしていないため、それらが近接する土地は自ずと不整形になってしまう。

その土地を占めたのが、学校（阿部家によって明治23年に創立された誠之舎）や西片公園といった公共的空間である。そして、その周囲には、異なる性格の地区が並ぶが、この緩衝空間が、かつては住宅地と阿部家屋敷地を、現在では明治と昭和の住宅地を隔て、対照させることにより、各々の特質をより際立たせている。

●内からの形成原理

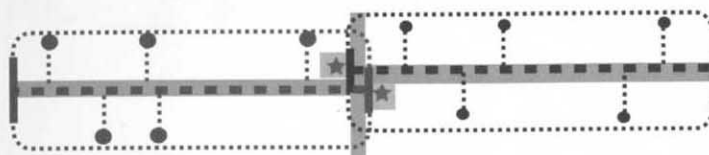
西片公園が、阿部公園として公園化されたのが昭和5年である。当地は、阿部家の屋敷地内ではあったが、明治の頃より子供たちの遊び場、まちの人々の集いの場として開放され、まちの人々と阿部家を結びつける重要な空間であった。さらに、この広場には、地域のシンボルとしての大椎の木があり、西片公園はまさに物心両面において、まちの核であり、その周囲の住宅地を束ね、空間的まとまりを創り出している。 (岡村 祐)

【整然とした組屋敷の町割り】

中山道沿いの町屋の裏手には、中央の南北街路の左右両側にほぼ同じ間口で、塀を設えた下級武士の屋敷（組屋敷）が並んでいた。組屋敷は一つ一つの敷地が塀で囲われており、塀の内側に敷地規模に対して比較的小さな邸宅が広大な庭を伴って立地していた。明治期以降に、組屋敷の敷地は分割され、かつての庭部分にも家屋が建ち並ぶようになった。



【東⑤】 江戸末期の東片町 (『復元江戸情報地図』より)



【東⑥】 大繩地を継承した東片町の一団地の模式図



【東⑧】 入口の折れ曲がり
中山道からの入口。なお現在は直線になっている西側のアプローチ街路も、戦前まではやはり同様に折れ曲がっていた。

【路地の奥行き感】

かつての組屋敷を分割する際に形成された路地。組屋敷の奥行きまで行き止まるか、折れ曲がる。



【東⑦】 中央街路から延びる路地

●「一団地」的なまとまり

西片町を抜けて東片町へ向うと中山道に出る。かつて商店が軒を連ねていた沿道には、現在では中層のビルやマンションが並ぶ。東片町で興味深いのはこの中山道の裏手である。まさに「入り込んでしまった」と感じさせる、周囲とは一線を画した「一団地」として容易に認識されるまちがビルの裏手に広がっている。

とはいえ建ち並んでいる建物は特徴的とは言いがたいし、勿論まち全体が崖や塀で囲われているわけではない。「一団地」的な領域をつくりだす空間的仕掛けは、実は街路にある。

●「折れ」「止まり」「違い」

第一の仕掛けは、まちに入る際の「折れ」にある(東③)。旧中山道や本郷通りから東片町に入る主要なアプローチ街路は、一度折れ曲がってから東片町に到達する。この折れ曲がり、東片町と中山道、本郷通りの間の見通しを許さず、境界を強調する。つまり、境界となっている。

第二の仕掛けは、中央街路の「止まり」と「違い」にある(東④)。まち

の中央から南北に相似的に延びる中央街路は、共にその端部は行き止まりである。そして中点の交差点は、十字形をとらず微妙に軸を違えており、視線が南北に一気に抜けられない。つまり、空間は閉ざされている。交差点から端部の行き止まりまでの距離感が強く印象付けられる。

第三の仕掛けは、中央街路から幾筋も延びる路地の、「止まり」や「折れ」にある。全ての路地は、一様にある距離で行き止まるか、折れ曲がる。この一定の奥行きが、まちの横幅として常に視認されている。

●継承される大繩地のデザイン

つまり、「折・止・違」が生み出す貫通しない半閉じの街路形態が、まちの一団地感を担保している。この形態は、江戸期に大繩地として一団地の組屋敷を開発した際に採用されたと推測される。かつて防衛や身分別住み分けの観点から布置された仕掛けが、気を抜くと周囲とすぐに同化してしまうまでに、強い領域性を与える空間システムとして継承されているのである。(中島直人)

空間文化の博物学からの出発

まちが内包する空間文化

われわれが本郷台地を歩いた契機は外発的であった。しかし、いざ歩いてみると、多様な境界が隣り合わせになって存在し、各境界には語りかけてくる都市空間が彼処に点在していて、飽きることがなかった。そして、そうした都市空間の起源を遡っていくことで、それぞれのまちに

仕掛けられた空間操作、埋め込まれた空間構想を看取していった。本郷

台地のまちが備えていた空間の仕掛け、構想の総体は、本郷台地の空間文化と呼んで差し支えないだろう。

しかし、先に述べたように、本郷台地は特別なまちではない。だとすれば、本郷台地に限らずあらゆるまちが、ほどかれるべき空間文化を持っているのではないだろうか。

都市デザインやまちづくりの最初

〔昭和初期の石神井池・三宝寺池〕
〔東京府「風致地区改善施設概要」より〕
石神井池（上）は地元有志の手で新たに開削された人造池である。樹林に囲われて幽遠な雰囲気の漂う三宝寺池（下）とは対照的に、陽光が注ぎ、ボートが浮かぶ。「対比」を仕掛けて、まちの核をより強固なものにする空間の構想力が確認される。



ば、まちが内包する空間文化こそが、まちの構想力の原点なのである。

まちを構想するための博物図鑑

そうした結論に達した時には、われわれは既に本郷のまちを越えて、東京を隈なく歩き始めていた。次回以降、次第に集まりつつあるまちの空間文化を、それが示唆する構想力の記述を軸に、幾つかのカテゴリーに分けて紹介していくことにする。

連載では、空間文化をまちづくりや都市計画の手がかりとして捉える視点を貫徹するつもりである。空間文化自身の発見に安穩としてはいけぬ。それが示す構想力こそが肝心である。現時点では、まちの地形が生み出す構想力、まちの街路が生み出す構想力、まちの図像が生み出す構想力、まちの情景が生み出す構想力の四つの力が予見されている。

また、これらの空間文化は一見してカタログ的に表示されることになり、どのまちにも自由に適用可能な程度に抽象化、普遍化することにはそれほど意を注がない。具体的、

個別的な記述も容認する。

というのも空間文化は、本来的には各まちが内包しているものであり、地形や立地といったまちの特性から切り離すことはできないからである。それは、第一には、借用して適用するのではなく、発見して磨き上げるべきものである。

つまり、われわれが提供しようとするのは、気軽に注文可能な商品を並べたカタログではなく、むしろ東京の都市空間を対象とした博物学の成果としての図鑑に近いものである。ただし古典的な重く座したような図鑑ではない。それはダイナミックに次の活動を、つまり空間の構想を誘発するような機動的でわくわくする図鑑である。願わくば手引き書となることを期待する代物である。

かつて昆虫図鑑を見て興奮し、野原に出て夢中になって蝶々を追いかけたように、この図鑑を片手に自分のまちを隈なく歩き、各まちでそれぞれの空間文化を発見する、そうした活動の誘発こそが、本連載が構想する「まちづくり」への寄与である。

（中島直人）